

自分の歌ぐえ

柴田佳美

歌のなかでは、典型的な決まり文句や通俗的な表現は使わない方がいいと言われる。それは、よく使われる表現を借りているにすぎないからだろう。かといって、奇抜になりすぎずに、自分の歌ぐえを見つけるのは案外難しい。

そこで今回は、魅力的な歌のなかで、作者自身の言葉がどんなふうになかされて見えてみたいと思う。

まず、朝日新聞（二〇二四年五月一日夕刊）「あるきだす言葉たち」の一首。

群れの距離、群れ同士の距離はかりつつ
白鳥が飛ぶ春待ちの空 福士りか

はるかな大空の白鳥の群れの姿。群れと群れを描くことでさらに場面が広がっている。

結句は「春待ちの空」である。俳句の季語の「春待つ」を想像する自然な言葉であるが、多くの人が歌に使ったりはしない。場面の背景が見えてくる言葉だ。例えば、結句が「一糸乱れず」や「春はすぐそこ」であつたらまるで魅力がない。

また、幼いころから自分の言葉で日常を詠

んできた人に、松田梨子、わこ姉妹がいる。その父母の徹、由紀子と共著の歌集『ソナタを弾こう』を読んだ。

雪が消え四角に戻ったグラウンド四角く
走つてうれしくなった 松田わこ

これ以上もし白かったら人間の目には見えないかもね初雪 松田梨子

退屈な夫かなオレ週末の男の料理も量つて作る 松田徹

反抗期の子の言い分はぐちゃぐちゃでめ
ちゃめちゃでたまに鋭く光る 松田由紀子

一首目、雪が解けたあとの場面を、「四角」というシンプルな言葉でゆたかに表現する。言葉の若々しい呼吸を感じる。

二首目、子どもは大人とは違う柔軟な発想をすることがある。そんなときの子どもの大真面目な不思議さ。「これ以上もし」の歌いだしにリアルな作者の声が出ている。

三首目、お料理の場面に切ない心理が加わり奥行を出している。「退屈な夫かなオレ」の話し言葉が、飾りを脱ぎ去って真実味に近

づいていこうとしている感じがいい。

四首目、言葉にならないような感覚や感情を迫力のあるリズムで表現している印象だ。結句で視覚的に仕上げています。

この歌集から、難解な言葉や耳に新しい言葉を使わなくても、个性的で新鮮味のある自分の言葉を見つげられることを再確認した。つぎに、堀静香歌集『みじかい曲』を見た。肩に力が入っていない、ごく自然体な作者の言葉が印象的であった。

行きよりも帰りのほうが心地よいこの町をすこしだけ好きになる

ポケットのなかでいじっていたガムのいいよ包み紙がはがれる

心臓が身体のなかにふたつある ひとつは倍の速さで動く

不思議な充実感と清潔感がある。作者の日常に呼吸を合わせながら、心地よく読んだ。

「わたしはわたしだけの身体とところを携えて、用心深く、同じだけ大雑把に、この世界を見つめたい」（あとがきより）。

まことにそのとおりだと思う。自分だけの身体とところがある。言葉はそのなかにある。言葉は生きていて息をしている。既成の表現に頼ることは、自分のこえをながしろにすることだ。自分のこえで歌いたい。